

金メダリスト・前畑秀子を伝える

——ドキュメンタリーの制作・発信——

柝 窪 優 二*

Telling the World about Olympic Gold-Medallist Hideko Maehata

——Production and General Release of a Documentary——

Yuji TOCHIKUBO

はじめに

椋山女学園大学文化情報学部 of 柝窪ゼミは、社会情報を映像で伝えることをテーマに研究・活動している。名古屋市広報課や東山動植物園との地域連携プロジェクトを中心に取り組んでいるほか、ゼミ全員が共同でドキュメンタリーを制作することもある。その一環として2019年～2020年、日本女性初の金メダリスト・前畑秀子さん（本学園出身）をテーマにしたドキュメンタリー「金メダル以上の価値～前畑秀子のメッセージ」（長さ20分15秒）を制作した。椋山歴史文化館の協力で、ゼミ学生12人と教員でプロジェクトを組んで制作した作品で、著者は指導教員であると共に、プロデューサー・チーフディレクターを担当し、2020年5月末に椋山女学園大学YouTubeで公開した¹⁾。映像公開時、毎日新聞と中日新聞で紹介記事が掲載されたほか、同年6月から愛知県を中心に各地のケーブルテレビ17局でドキュメンタリー番組として放送された。また9月に開催された「あいち国際女性映画祭2020」ではコンベンション部門でノミネートされたほか、11月に開催された「地方の時代映像祭2020」にも参加した。こうした本格的なドキュメンタリーを女子大のゼミで制作し、それが各地のケーブルテレビで放送され、新聞や映像祭等で注目されることは、あまり例のないことである。そこで本稿では柝窪ゼミ・ドキュメンタリー制作プロジェクトについて、企画意図や制作の視点を紹介しながら、学生指導の留意点などを分析・評価し、大学における映像メディア教育の意義や課題を考察した。

1. 作品の企画

(1) 企画意図

このドキュメンタリーは2019年10月から企画を検討した。柝窪ゼミでは学生の卒業作

* 文化情報学部 メディア情報学科

品を3年・前期で企画し、夏休み後半で取材・撮影して、9月末の後期授業スタートと共に編集を開始している。ドキュメンタリーは、その卒業作品とはやや性格が違う番外篇的な作品で、学生一人一人の卒業制作と並行してゼミ全体のプロジェクトとして取り組んだ。

企画で重要なことは作品テーマで、ゼミ学生に企画案の提案を求めた。しかし実現可能なテーマは見つからなく、ドキュメンタリー制作は断念せざるを得ない状況になった。そこで教員から前畑秀子さんのドキュメンタリー制作を提案した。栢窪ゼミは梶山歴史文化館と共同で短篇の映像シリーズをこれまで10本程度制作していて、2013年には「金メダリスト・前畑秀子を知る」(長さ4分)を制作している。2020年は東京オリンピック開催(予定)なので、本学園出身の日本女性初・金メダリストを紹介するタイムリーな企画テーマである。ただし制作上の課題は多い。そこを栢窪ゼミと梶山歴史文化館とで打合せを進めることにした。

(2) プロジェクト立ち上げ

2019年10月から梶山歴史文化館で毎週打合せを始めた。栢窪ゼミは木曜・午後にメディア棟スタジオで映像制作中心のゼミをしているが、木曜は梶山歴史文化館が閉館日なので打合せはできない。そこで水曜・午後を定例の打合せ日に設定して、栢窪ゼミでその時間に対応できる学生2人をディレクター担当に決めた。メンバーは、梶山歴史文化館は館長先生と担当職員、栢窪ゼミは学生2人と教員・栢窪である。

ドキュメンタリーの柱は「何を伝えるか?」という企画意図である。2019年秋は東京オリンピック開催を前に新聞やテレビで五輪関連の企画や特集が多く組まれていた時期である。NHKは同年8月に紀の国スペシャル「前畑がんばれ!日本初の女性金メダリスト誕生秘話」(NHK和歌山放送局制作)を放送、その後9月に大河ドラマ『いだてん』で「前畑がんばれ」、翌年1月に歴史秘話ヒストリア「前畑がんばれ誕生!女性初の金メダル」を放送している。梶山歴史文化館でも紀の国スペシャルと歴史秘話ヒストリアの取材に対応した。そうしたなか歴史文化館側から、「テレビ番組では前畑さんのその後の人生や社会貢献、前畑さんを育てた梶山女学園との関係が抜け落ちている」という意見が出された。また歴史文化館には前畑さん本人のアルバムが保管されていて、未公開の写真が数多くあることも判明した。そこでゼミ学生と相談して、11月に正式にドキュメンタリー制作プロジェクトを立ち上げ、テレビが伝えなかった日本女性初・金メダリストの前畑秀子さんを伝える作品を制作することにした。

(3) 制作予定

この時期、ゼミ学生は卒業作品の編集に全力で取り組んでいる。そのあと学生は翌年春からは4年生になり就職活動が本格化する。ただし東京オリンピック開催(予定)が7月なので、4月～5月には作品を完成・公開させる必要がある。そこで2019年から翌年にかけて、下記の制作スケジュールを決めた。

【ドキュメンタリーの制作スケジュール(2019年～2020年)】

- ・10月～事前のリサーチ、関係者と打合せ
- ・11月～プロジェクト立ち上げ、資料収集、構成検討、仮台本を作成

- ・12月～仮編集，仮ナレーション収録，仮の音楽選曲
- ・1月～構成の見直し，本編集①，ナレーション収録
- ・2月～取材・撮影（椋山女学園高校・水泳部，兵藤尚子さん，椋山歴史文化館）
- ・3月～本編集②
- ・4月～最終確認・仕上げ，完成
- ・5月～作品公開

ドキュメンタリーは取材・撮影が終わったあと，映像を編集するのが普通である。しかし今回は撮影前に第一段階の編集を行うことにした。これは前畑秀子さん本人がすでに他界しているため，写真や資料映像などで作品を構成する部分が多いからである。撮影する部分を除いた形でドキュメンタリー全体の編集を進め，それをもとに修正が必要な部分を浮き彫りにして，作品全体の制作を進めることにした。そうした制作スタイルによって，最終編集段階に必要な映像が不足するリスクを回避した。また音楽の選曲やCG作成も事前に作業を進めた。昔はこうした制作手法は難しかったが，今はコンピューターを使ったノンリニア編集なので簡単にできる。映像編集はプロ用のEDIUS Pro9で行った。

作品の長さは20分程度，映像にナレーションを入れる形で，リポーターは起用しない。ゼミ学生がインタビューや取材している様子を，自然な感じで紹介する映像形式にした。今回はケーブルテレビへの放送打診や映画祭等への参加を視野に入れ，正式な企画書を作成してゼミ・メンバー全員で共有した。

2. ドキュメンタリーの構成

(1) 作品タイトル決定

構成を検討する段階で，タイトルを決める必要がある。タイトルは完成時に変更できるが，ドキュメンタリーは「何を伝えるか？」が重要で，それを一言で象徴するのがタイトルである。逆にタイトルから作品全体の構成が決まることもある。そこで椋山歴史文化館から提案のあった内容も含め，ご本人の著書を読んで詳しく調査・検討した。前畑秀さんの著書は，「前畑ガンバレ」（金の星社・1981年）と「前畑は二度がんばりました」（ごま書房・1985年）の2冊ある。「前畑ガンバレ」は児童・生徒向けにベルリン五輪・金メダル獲得までの歩みを伝えている。「前畑は二度がんばりました」は一般向けに，ベルリン五輪後の半生を中心に書かれている。事前リサーチを進めるなかで「前畑は二度がんばりました」に，「夫が死んだとき，私は死んだも同然でした。… そこから立ち上がった体験は，あるいは金メダル以上の価値があったかもしれません。」という記述があった。それを読んで，前畑さんが晩年に綴った「金メダル以上の価値」とは何だろう？と素朴な疑問を感じた。ドキュメンタリーは事実の一部しか伝えられない。しかし，どの部分を伝えるかが制作者のメッセージになり，タイトルはそのメッセージを象徴するキーワードになる。前畑さんが晩年に綴った「金メダル以上の価値」，これが企画意図を象徴するキーワードだと感じた。そこで作品タイトルは「金メダル以上の価値～前畑秀子のメッセージ」に決めた。

(2) 作品の流れ

この作品はインターネット動画公開を前提に長さは20分程度を想定した。ドキュメンタリーとしては短いが短篇映像ではない。したがって全体の流れ・構成が複雑で、情報量が多く、それを上手く整理することが制作上の難しい部分になる。こうした性格の作品は、前畑さんの誕生から晩年までを時系列で紹介する形を基本にしながら、オープニングやエンディングで「つかみ」を挿入し、メッセージを効果的に伝える構成が一般的だ。作品の性格上、「写真+ナレーション」が多くなるが、それが長く続くと単調になり、メッセージ性は失われる。「写真+ナレーション」の間に、「インタビュー」や「現場の音/音楽」、「レポート」などを挿入して、映像に変化をつけながら表現する必要がある。ただし今回、リポーターは起用しないので「レポート」は挿入できない。そこで「夫が死んだとき、私は死んだも同然でした。…そこから立ち上がった体験は、あるいは金メダル以上の価値があったかもしれません。」という部分を著書引用の形で学生ナレーターが朗読することにした。

ドキュメンタリーは新しい事実や発見をもとにメッセージを伝えることが大切で、今回は前畑さん本人のアルバム写真が大きな素材になった。椋山歴史文化館にはアルバム写真が約1000枚あるが、ドキュメンタリーで紹介できるのは多くても20枚程度で、写真の価値を判断する必要がある。リサーチを進めるなかで2枚の写真に注目した。1928年アムステルダムオリンピック（陸上800m・第二位）で日本女性初のメダリストになった人見絹枝さんのサイン入り写真だ。写真の脇には「人見さん 姉のように仲良しだった」、「今はなき人見絹枝さん」という前畑さん本人の添え書きがあった。人見絹枝さんは大阪毎日新聞社の運動記者で前畑さんを取材・激励していて、そうしたエールが、前畑さんの金メダルやその後の女性アスリートの活躍につながったことを示す貴重な写真であった。そこで、この写真を紹介することを前提に構成を検討した。その後の調査で、この人見さんの写真はドキュメンタリー映像などで公式に公開されるのは今回が初めてだと判明し、映像公開時の新聞報道などにつながった。また証言者として前畑さんの二男の妻、兵頭尚子さんと椋山歴史文化館の館長にインタビューすることにした。こうした内容をもとに、下記の6つのロールにわけて作品を構成することに決めた。

【ドキュメンタリーの構成（計20分15秒）】

R-1：プロローグ	45秒
R-2：前畑さんと椋山女学園	3分58秒
R-3：ベルリンオリンピック	3分13秒
R-4：結婚/夫との死別/椋山女学園勤務	3分28秒
R-5：水泳教室/脳溢血/再起	3分32秒
R-6：人見さん写真/金メダル以上の価値/まとめ	3分46秒

(3) 取材項目の選定

構成案をもとに撮影台本&編集台本&ナレーション原稿を作成した。このドキュメンタリーは昔の写真や映像を多く使用するほか、金剛鐘や山添キャンパスなどは過去に柝窪ゼミが撮影した資料映像を使うことにした。そのため実際のカメラ撮影が必要な部分は予

想以上に少なかった。台本作成時に想定した撮影項目は下記の通りである。

【カメラ撮影が必要な取材】

- ・ 椋山女学園高校水泳部（練習風景と部員インタビュー）
- ・ 兵頭尚子さん（インタビュー）
- ・ 椋山美恵子歴史文化館長（インタビュー）
- ・ 取材学生の様子（企画会議，取材風景，制作の様子）
- ・ その他（雑感）

3. ゼミ学生の指導

(1) プロジェクトの指導

事前のリサーチを経て，11月に制作プロジェクトを立ち上げた。ただしゼミ全体としては，学生は卒業作品（名古屋市広報映像と東山動植物園映像）を編集中で，時間的にも精神的にも余裕がない状態だった。そこで教員・柗窪が仮台本を作成し，それを出発点に学生の指導を進めた。11月下旬になって学生1人が卒業作品を完成させ，余裕ができた。そこでこの学生が仮台本をもとに仮編集を開始した。12月に入り，さらに学生2人が卒業作品を完成させ，1人は仮ナレーション，もう1人は音楽選曲を担当した。12月下旬にはゼミ12人全員の卒業作品が完成した。そこで教員が冬休み期間に仮編集した映像を確認・修正し，それをもとに1月からゼミ全体で制作作業に入った。通常の映像制作は，撮影前に映像編集しても作品の全容はつかめないことが多いが，今回は写真や資料映像が多いことから，この段階で作品の全体像は浮き彫りになった。そこで仮編集をさらに進め，本編集に入り，「朗読」も含め学生4人が本番ナレーションも収録した。



写真1 学生の映像編集

ドキュメンタリーは「何を伝えるか?」を軸に映像を構成する。それが取材・撮影後に作成する台本に集約される。しかし今回は撮影前に台本がある変則的な制作工程になったが、学生の視点で見ると映像制作の方向性が全員で共有できた点は良かった。ただし映像作品の台本は極めて大きな役割を果たすので、教員・プロデューサーの責務は重大であった。

(2) 制作プロセスの留意点

制作に参加したゼミ学生は、自分の卒業制作で企画・構成、取材・撮影、レポート、ナレーション収録、映像編集など全ての工程を経験したあとに、このドキュメンタリーに挑戦した。このことは教員が学生を指導する上で重要なポイントになった。映像制作は幅広い専門性が求められ、初心者への指導は困難を極め、ある程度経験を積まなければ理解できない側面がある。それに対して今回は学生全員が制作経験があり、自分自身の経験をもとに自由に伸び伸びとプロジェクトに参加できた。ナレーターは4人で担当したが、担当した学生は卒業作品の制作経験やナレーター経験をもとに、自分の世界を広げられた。

教員としては、通常の映像制作とはやや異なる制作プロセスで学生を指導することで、迷いもあった。しかしながら、今回のドキュメンタリーはテレビ局のプロが制作しても難しい作品である。学生が卒業後、テレビ業界に就職しても、こうした番組のディレクターになるには最低5～10年はかかる。そうした意味では、学生にとって制作チームの一員として参加するだけでも貴重な経験になり、大きな教育効果があったと思う。



写真2 ナレーション収録

4. 取材・撮影

1月末までに本番ナレーション収録、本編集を完了させ、2月にいよいよ撮影ロケを実

施した。大学は春休み期間だが、栃窪ゼミは3年生の間に、就活に備えて4年前期分までのゼミを進める予定なので、学生も積極的に参加した。取材・撮影の内容と日時は下記の通りである。

【取材・撮影】

①2月4日15時半～16時半

椋山女学園高校水泳部の練習風景と部員インタビュー

②2月19日9時半～11時半

前畑さんの二男の妻・兵藤尚子さん（椋山女学園・水泳部出身）インタビュー
椋山女学園大学星が丘キャンパス（学園センター会議室）

③2月19日13時～14時半

椋山歴史文化館・椋山美恵子館長インタビュー

④3月・追加撮影

椋山歴史文化館の展示/星が丘キャンパスの雑感

※取材・撮影①②③はゼミ全員で実施，④は教員が撮影

取材・撮影は、ディレクター、インタビューア、カメラ、撮影補助・照明、音声という学生の担当ポジションを決めて行った。すでに前年9月に撮影ロケを経験しているので、学生は違和感なく参加できた。撮影はメインカメラ2台、サブカメラ2台を使用し、インタビューは原則としてワイアレスピンマイクを使って収録した。ドキュメンタリー制作としては取材・撮影する項目が驚くほど少ないが、その分、企画・構成のウエートが大きくなる。このほか前畑秀子さんの出身地・和歌山県橋本市を映像取材したが、学生が撮影に行くに費用がかかるので、教員が休みのとき個人的に現地を撮影する形で対応した。



写真3 取材・撮影（椋山歴史文化館）

5. 編集・仕上

(1) 最終の映像編集

3月に最終の映像編集を実施した。すでに撮影ロケ部分を除いた全体の編集は完了していた。ナレーション収録、音楽の選曲、CG作成も終わっていた。そこで教員・柝窪が学生の春休み期間に最終編集をした。ノンリニア編集でブランクになっている部分に撮影映像を編集し、必要な音声処理やCG等を追加した。またエンディング部分を少しリメイクして、ドキュメンタリー全体の尺を調整した。その上で、全体に間違い等がないか、栢山歴史文化館に監修を依頼した。また映像をインターネットで関係者だけ視聴できるようにして、ゼミ学生が確認作業を進めた。最終編集の段階でナレーション原稿に変更が生じる場合が多いが、今回は1月の編集時にしっかり検討・修正したことから、ナレーション台本の変更はなかった。ただしナレーターのアクセントや発音に甘い部分が2か所あり、4月の最終仕上げの段階で再収録することにした。最終的な作品の長さは20分15秒になった。ドキュメンタリーとしては、もう少し長くても問題ないが、今回は栢山女学園大学YouTubeでの公開を想定して長さ20分を目標にしており、当初の企画に沿った映像になった。

(2) 仕上げ・完成

4月からの前期ゼミで学生と一緒に作品の最終確認・仕上げをする予定であった。ところが新型コロナウイルスの感染拡大で大学は学生の立ち入りが禁止され、対面授業が実施できない状況になった。そこで遠隔授業で、ゼミ学生がインターネットで編集済み映像を確認し、修正が必要な部分を洗い出す形で作品を仕上げることにした。再収録を予定していたナレーション部分は、学生を大学スタジオに呼んで収録するのが不可能になったので、修正を断念した。学生が確認した結果、CG表記や音声レベルの一部に問題があり、それを教員が修正した。また4月の段階で東京オリンピックが新型コロナウイルス感染拡大の影響で1年延期されることが決定したので、本編映像にその部分と整合性を持たせるためのCG表記を追加した。こうした作業を経てドキュメンタリーは4月末に完成した。

6. 作品の公開・発信

完成作品は栢山女学園大学YouTubeで5月末に公開した。このドキュメンタリーは東京オリンピック開催に合わせて制作したので話題性がある。そこで地元のケーブルテレビ(CATV)に対して放送を打診した。その結果、一宮市のアイ・シー・シーが6月放送を決めたほか、(株)コミュニティネットワークセンター(CNCI)から番組を配信する形で、最終的には17局で放送された。

【ケーブルテレビ(CATV)の放送実績】(2020年6月～8月)
アイ・シー・シー ICC(愛知・一宮市)
スターキャット・ケーブルネットワーク(愛知・名古屋市)
稲沢CATV(愛知・稲沢市)

知多メディアス（愛知・東海市）
知多半島ケーブル（愛知・常滑市，武豊町，美浜町，南知多町）
大垣ケーブルテレビ（岐阜・大垣市）
おりべネットワーク（岐阜・多治見市，土岐市，瑞浪市）
ケーブルテレビ可児（岐阜・可児市）
あさがおテレビ（石川県）
よさこいケーブルネット（高知県）
伊万里ケーブル（佐賀県）
テレビ鳴門（徳島県）
三沢市ケーブルテレビジョン（青森県）
となみ映像通信テレビ（富山県）
NICE TV（富山県）
やすぎどじょっこテレビ（島根県）
山陰ケーブルテレビ（島根県）

学生ゼミが前畑秀子さんの本格的なドキュメンタリーを制作したことで、毎日新聞（5月25日朝刊）^{2) 3)}と中日新聞（6月12日朝刊）⁴⁾，読売新聞（7月2日朝刊）⁵⁾に紹介記事が掲載された。また2020年9月に名古屋で開催された「あいち国際女性映画祭2020」でコンベンション上映作品としてノミネートされたほか、同年11月に大阪で開催された「地方の時代映像祭2020」にも参加した。

7. まとめ

今回のドキュメンタリーは、映画・芸術系が専門の大学ではなく、一般的な女子大学（メディア情報専攻）で企画・制作した点が大きな特長で、指導上の制約もあった。しかしプロジェクトが終わってみたら、新聞に記事が大きく掲載され、ケーブルテレビ計17局で放送され、映画祭等で高い評価を受けるなど、予想以上の反響が寄せられた。学生にとって、自分たちの作った作品が新聞等で大きく取り上げ、映画祭の大スクリーンで上映され、大きな達成感を感じたようだ。

ドキュメンタリーの制作は、ショートムービーや広報映像とは違って、長期間の取材・撮影が必要で、より強いメッセージ性が求められる。テレビの制作現場では新人ディレクターには難しい作品ジャンルである。その一方、大学などのメディア教育、なかでも映像コンテンツ制作では、一般的に研究・教育の柱になる映像ジャンルでもある。しかしながら著者は本学で学生指導に取り組んで14年目になるが、「学生の教育モデルにはドキュメンタリー制作は適さない」という思いを持ってきた。つまり難しいドキュメンタリーは、初心者の学生には企画段階で完成作品をイメージできなくて、結果的に理解が不足するなかで、教員に指導され、消化不良のまま作品を完成させることが問題だと思ってきた。そのため私のゼミでは名古屋市広報課や東山動植物園と連携した地域連携プロジェクトによるショートムービーを数多く制作している。

今回のドキュメンタリー制作プロジェクトは、そうした視点も含めて、女子大ゼミの教

育モデルになるような制作スタイルを探った実践的な試みとも言える。映像制作はインターネット・SNSの広がりやノンリニア編集の普及で大きく変化している。その一方、制作環境は進歩しても、ドキュメンタリーでは「何を伝えるのか?」という制作者のメッセージが最も重要なことは今も昔も変わらない。制作技術が向上しても映像構成の考え方は変わっていない。大学におけるドキュメンタリー制作指導は課題も多いが、今回の制作事例をもとに、映像コンテンツ制作指導の在り方を今後も実践的に探っていきたい。この研究は令和2年度の学園研究費助成金(B)による研究成果である。プロジェクトにご協力いただいた関係者にお礼申し上げます。

参考文献等

- 1) 椋山女学園大学 YouTube 「金メダル以上の価値～前畑秀子のメッセージ～」
<https://youtu.be/N85QUIzVQc8>
- 2) 毎日新聞2020年5月25日朝刊(全国版・社会面) / 毎日新聞デジタル
「前畑秀子さんと人見絹枝さんの交流記録女子スポーツの立役者名古屋で確認」
<https://mainichi.jp/articles/20200524/k00/00m/040/098000c>
- 3) 毎日新聞2020年5月25日朝刊(愛知県版) / 毎日新聞デジタル
「五輪の重圧、通じ合う心前畑秀子さんと人見絹枝さんの交流学生が番組制作」
<https://mainichi.jp/articles/20200524/k00/00m/040/086000c>
- 4) 中日新聞/東京新聞2020年6月12日朝刊(愛知県版)
「前畑さんのドキュメンタリー映像制作母校・椋山女学園大」
<https://www.chunichi.co.jp/article/71721?rct=aichi>
- 5) 読売新聞2020年7月2日朝刊(愛知県版)
「困難乗り越えた生涯に光 学生12人が動画制作」